

説教 『女がふれた福音の深み』山本 護 牧師  
聖書 ヨブ記 14:1~4/マタイによる福音書 26:6~13

気温こそ低いが陽光は明るく、春が間近に予感させられる。教会の歴は季節に少し遅れ、今週の水曜日から四旬節(受難節)が始まり、十字架に近づきながら暗闇はいっそう深まっていく。今日の聖書箇所、一人の女がイエスに香油を注ぎかける場面(マタイ 26:6~7)は、受難が始まるとする暗闇に挟まれており、直前にはイエス殺害の計略が(26:3~5)、直後にはユダの裏切り(26:14~16)が位置している。

香油を注いだ女の出来事は、釈義の仕方として、他福音書の同記述と比較しながら掘り下げたりするが、今日は場面の第一印象を入りにしたい。何よりも印象的なのは女の不可思議な透明さ。それにしても、我ながら何に透明感を覚えるのか。イエスは「らい病の人シモンのおられた(26:6)」。そして接触の禁忌(レビ 13:45~46)なぞまるで気にせず、平気で食事をしていた(マタイ 26:7)。女や子供も近づきやすいイエスの気さくな人柄が想像される。あたかも受難の闇にぽっと現れた焚火のようだ。

「一人の女が、極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席についておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた(26:7)」。尊敬による奉仕だとしても、これはいくらなんでも異様だ。「弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。[なぜ、こんな無駄遣いをするのか。高く売って、貧しい人々に施すことができたのに](26:8~9)」。弟子たちは女の異常なふるまいに憤慨し、そして「貧しい人々への施し云々」と合理的な説明をつけて譴責した。その場の大騒ぎとは対照的にイエスは、髪に香油を滴らせたまま「なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ(26:10)」と、とぼけたように平然と応じている。イエスと弟子たちとのこの違いは、重要な何かを物語っている。

この場面の結語としてイエスは、「はっきり言うておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう(26:13)」と語った。女がした「良いこと」とは福音「良きおとずれ」の響きなのか。受難の闇に灯った小さな光。光は、男ではなく女によって灯された。弟子たちは「イエスが心をむけた貧者への配慮」によってこれを拒み(26:9)、女は異様な奉仕によってキリストの本質に触れた。「この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた(26:12)」。葬りの香油と没薬(ヨハネ 19:39~40)。思い起こせば降誕の折にも香油と没薬が献じられている(マタイ 2:11)。それもイスラエルの民によってではなく、東方の異教者によって(2:1)。

私たちがこの女のように透明でありたい。イエスに従い、透明な思いで福音の深みにふれたい。女と同じく私たちには権威なぞ不要だし、東方の異教者のように柔軟かつ横断的でありたい。女のように非常識でも自分で踏み出し、星に導かれた異教者のごとく霊の風に吹かれて旅をしたい。「貧しい人々に施す(26:9)」姿勢も大切だが、私たちが頼りとするのは合理的な判断を超える福音の力なのだ。

イエスと共に受難にむかう弟子たちは、女の透明さが分かっただろうか。不合理に見える福音を受容できるか。弟子たちは転びながら、背きながら、傷つきながら受け入れることになる。だが福音の不合理を受け入れられない弟子もいた(26:16)。私たちは転びながらも、イエスの弟子として歩む。



#### 【おまけのひとこと】

暗闇を恐れるな 目を凝らせば微かな灯が見つかるだろう 力や見通しとは無縁な光 遠望できるものではない この掌で包み込む程度がふさわしい 一人ひとりに 静かに手渡しする福音の灯